

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないこと。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けること。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下とすること。

NITS・教職大学院・ 教育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 国立大学法人福島大学大学院教育実践研究科 事業名：【NITS・福島大学大学院コラボ研修】 学び続ける教師コミュニティ 学校改善リーダーシップ研修 2025～ミドルリーダー養成研修パート4～ 【第1回】 開催日時：令和7年7月26日 13時～16時40分 開催場所：福島大学（福島県福島市金谷川1番地） 参加人数（総数）と参加者の属性：（46人）小学校教員20人、中学校教員1人、高等学校教員3人、 特別支援学校教員5名、大学院生8人、教育行政3人、大学教員6名 【第2回】 開催日時：令和7年11月22日 13時～16時40分 開催場所：福島大学（福島県福島市金谷川1番地） 参加人数（総数）と参加者の属性：（28人）小学校教員9人、中学校教員1人、高等学校教員2人、 特別支援学校教員2名、大学院生9人、大学教員4名、その他1名
--	---

目的：

現在、学校には高度化・複雑化する諸問題への対応や子どもたちに21世紀を生き抜く力を育成することを目指す「令和の日本型学校教育」を担う新たな教職員の学びの姿の実現に向けて、参加者が主語になる「研修観の転換」を図った様々な改善が求められている。学校が授業改善や学校改善を持続的に進めていくためには、学校経営に自ら参画し、協働体制づくりを組織的に推進していくミドルリーダーの果たす役割が重要である。

福島大学大学院教職実践研究科（教職大学院）では、地域の教育課題について理解を深め、幅広い視野を備えるとともに、授業力、マネジメント力など高い実践力を身につけ、常に学び続け、教育課程の改善や学校改革を牽引するミドルリーダーの育成を目指している。

そこで、本研究科の知見を活かし、学校改善を牽引するミドルリーダーを目指す教員などが、2回の継続した研修を通して知識とスキル、豊かな気付きを得て、チームとしての組織マネジメントの推進の重要性を認識して、学校課題解決に向けた具体的方策を検討し実践につなげることを目的として本研修会を実施する。

内容：

【第1回】「学校教育課題整理と解決策の検討」令和7年7月26日

○ 講演「学校を元気にするミドルリーダーの在り方」岐阜聖徳学園大学教授 玉置崇先生

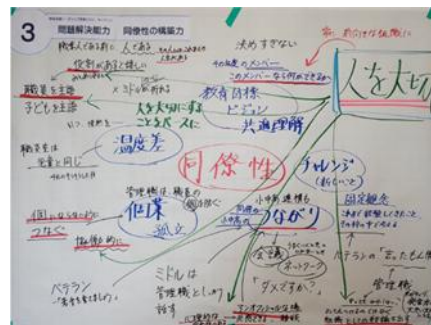
「課題解決能力：状況を把握し、チームを動かす力」「同僚性の構築力：信頼に基づき協働文化をつくる力」が、実効性あるリーダーシップの根幹であるとし、玉置氏が実際に出合ったミドルリーダーを紹介しながら、その重要性についての示唆をいただいた。

○ 実践発表

川俣町立川俣小学校 八巻千咲先生、本宮市立五百川小学校 菅野千恵先生、福島県立船引高等学校 鈴木麻友美先生の3名から、実践報告があった。3名とも、本教職大学院の修了生であり、大学院での研究を現場に戻ってどのように活かしているかの発表を依頼した。八巻先生からは「教務主任として日々意識していること」についての発表があった。菅野先生からは「孤立から共創へ、生徒指導主事がつなぐ協働の輪」というテーマで発表があった。鈴木先生からは「多様な生徒の進路実現に向けたミドルリーダーの取組」と題した発表があった。

○ グループディスカッション（課題整理と解決策の検討）

玉置先生の講演の中で示された「問題解決能力」「同僚性の構築力」をキーワードとしたディスカッションが行われた。校種や立場を超えて活発な話し合いが行われた。



【第2回】「実践の報告と研修のまとめ」令和7年11月22日

○ 講演「学校組織と協働、心理的安全性とリーダーシップ」前二本松市教育委員会教育長 丹野学先生

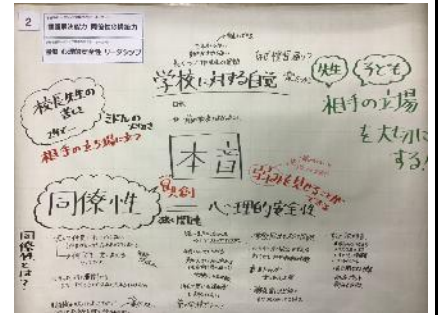
「50年間、福島県の教育界に身を置いた私から言えること」として、子どもがいるから学校があるのであって、学校があるから子どもがいるのではないこと（子どもが真ん中）。目の前の子どもたちに教育的愛情を注ぎ続けるためにも、学校のあらゆる教育環境の改善に取り組むことが、組織マネジメントそのものであることをご教授いただいた。

○ 実践発表

福島市立三河台小学校 野口卓也先生、郡山市立橋小学校 山内健太郎先生から、実践報告があった。山内先生は、本教職大学院の修了生である。野口先生からは、研修主任として意識していることとして「ワイガヤできる、悩みが言えるなどの同僚性の醸成」などの発表があった。山内先生からは、「教師のウェルビーイングを高める取り組み」として、「対話の重要性」「働きやすさと働きがいの両面からのアプローチ」についての発表があった。

○ グループディスカッション（実践の報告とまとめ）

第1回のキーワードに、「協働性」「心理的安全性」「リーダーシップ」を加え、ディスカッションが行われた。各班では、それぞれキーワードを据えて活発な意見交換が行われた。



成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載すること。

実施後のアンケートでは、「子どもを真ん中に置くこと、教育的愛情を注ぐために教育環境の改善に取り組むことが「組織マネジメント」そのものであること、学校の課題を解決するチームを目指すこと、学校は地域の中に在ること、「理論→実践」ではなく「実践→理論→実践」。お言葉一つ一つが心に残るお話でした。常にリセットと仰っていたように、自分は何故教師になることを志したのか、改めて考える時間となりました。（大学院生）「理論ばかりが先行するのではなく、まずは、目の前の子ども、教職員、自校の課題にしっかり目を向け、その解決策を模索していくことの大切さをとても感じました。（小学校教頭）」「同じ研修主任として校内でどんな働きができるか改めて認識できた。何を先生方と共有し、ともに何を求めていくのか整理したい。（特別支援学校教諭）などの感想が寄せられた。これらのことから、本研修にはミドルリーダーとしての役割の理解や資質の向上に際して一定の成果があったと考えられる。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

研修では、講義（講演）→演習（グループディスカッション）→振り返りの流れを重視しミドルリーダーとしての組織的・協働的な取組に視点を当てた自己の「在り方」への気付きが生まれるようにした。具体的には、第1回目を7月に実施し、そこで課題を明確にして、11月の第2回目に報告という流れをつかった。また、9月に希望者に対してオンラインでの情報交換を行った。このことにより、意識を持続させながら実践を行ったり、研修に参加したりすることができたと考える。第2回目の研修への参加者は、ほとんどが連続での参加であった。また、「研修観の転換」により、より深い学びになったと考えられる。

アイデアや工夫したこと：

- 年間2回の研修会とし、意識の向上を図った。（途中で希望者の情報交換会（オンライン）も実施）
- 本学教職大学院の修了生を発表者とし、理論と実践の往還を行った。
- 現場経験が豊富な方々に講師を依頼した。

【第1回目の様子】



【講演の様子】



【実践発表】



【グループディスカッション】



【第2回目の様子】



【講演の様子】



【実践発表】



【グループディスカッション】

